

半世紀にわたる「問題」を、いま問い直す。

不登校 50年

証言プロジェクト

学校基本調査で「学校嫌い」の統計が開始されたのは1966年。今年はそれから50年にあたります。学校を長期欠席する子どもは、学校制度とともに常にいました。しかし、現在につながる「問題」として不登校が社会現象化してきたのは、この統計開始以降とも言えます。この50年、不登校は「問題」であり続けてきました。それは、学校、教育行政、精神科医療、家族のあり方、働き方などが、さまざまに問われてきた「問題」だったと言えます。この50年は学校に行かない子どもたちにとって受難の歴史だった一方、親の会やフリースクールなどの市民運動が立ち現れてきました。いったい「不登校50年」の歴史は何を語るのでしょうか。不登校をめぐって、時代ごとにどんな状況があり、どのように問題とされ、どう対応されてきたのでしょうか。

不登校新聞社では、「不登校50年」を機に、証言プロジェクトを開始し、不登校経験者、親、親の会、居場所・フリースクール、医者、教員、学者、弁護士など、さまざまな関係者の生の声を集め、アーカイブにしていきます。インタビュー・寄稿は、社会的意義を考え、購読者に限定したのではなく、無料で公開します。そのため、プロジェクトは、寄付によって運営します。ぜひ、このプロジェクトへのご支援・ご協力をよろしく願います。

全国不登校新聞社

プロジェクトチーム（統括：山下耕平）

関東チーム委員：奥地主子、木村砂織、朝倉景樹、石林一男、加藤敦也、佐藤信一、

須永祐慈、関川ゆう子、野村芳美、藤田岳幸、前北海、増田良枝、松島裕之、山口幸子

関西チーム委員：山下耕平、石川良子、貴戸理恵、栗田隆子、田中佑弥、山田潤

#17 若林 実さん



(わかばやし・みのる)

1937年、神奈川県横浜市生まれ。1944年より3年間、佐渡島に疎開。田園生活を味わう。1968年、横浜市立大学大学院（小児科専攻）修了。医学博士。同年社会福祉法人国際親善病院小児科医長として赴任、私立の児童福祉施設横浜家庭学園嘱託医兼任、いわゆる非行少女たちと出会う機会をもつ。著書に『エジソンも不登校児だった』『アインシュタインも学校嫌いだった』（いずれも筑摩書房）など。（元）小児心身医学会評議員。

インタビュー日時：2016年11月17日

場 所：横浜家庭学園

聞き手：奥地圭子、関川ゆう子、石林正男

奥地 今日、横浜家庭学園にてインタビューさせていただくことになりました。いまは、ここにお勤めなんでしょうか。

若林 週に1回、医務室にきています。学校で言えば保健室の養護の先生みたいなものです。カゼ薬や胃薬を出したり、場合によっては病院を紹介したりしています。毎回、かならず2〜3人は来ます。もう30年ぐらいの関わりになります。国際親善病院に勤めていたときも、夜にきていました。横浜家庭学園創始者の有馬四郎助氏（1864―1934）のお孫さんにあたる、亡き有馬嗣郎氏に依頼されて来るようになったのですが、有馬さんは「何もなくてもいい、お説教したりしなくてもいい。話し相手になってくれればいい」と言っていました。

横浜家庭学園は

奥地 横浜家庭学園について、教えてください。

若林 横浜家庭学園は、学校教育から外れた、いわゆる非行の少女たちをあずかっています。制度上は、現在は児童自立支援施設になっています。

この学園は、有馬四郎助が1906年に幼年保護会を設立したところから始まっています。それまでは、少年でも大人と同じ監獄に入れられていたそうです。有馬四郎助は、クリスチャンで刑務官をしていた人で、かつては教科書にも載っていました。関東大震災のとき、有馬が所長をしていた監獄が全壊したそうです。でも、有馬に恩義を感じていた受刑者は、自分たちで自警団をつくって、ひとりの逃走者も出さなかったそうです。

もうひとり、留岡幸助（1864―1934）が1899年に東京家庭学校を設立していますが、留岡が「男は俺があずかる」と言って、1914年に北海道に分校をつくったのが、北海道家庭学校の始まりです。北海道家庭学校では、札付きの子どもたちばかりで農作業をやって、鎌とか短刀も持たせるのに、それを使った刃傷沙汰は、これまで一つもないそうです。心が穏やかになるのでしょう。

横浜家庭学園に見学に来る方も、「とても非行をしたとは思えない」と言っていて、びっくりすることが多いですね。

奥地 フリースクールでも、見学に来る人から「この子たち、ごくふつうの子ですよ。不登校したとは思えない」と言われてきました。横浜家庭学園は、何人くらいの子どもがいらっしやるんですか。

若林 平均して20人ぐらいですが、今後は、もう少し大きくなる予定です。人里離れた場所がいいというので、丘の上に建てられたのですが、子どもたちは「こんなところはイヤだ」と言っていて、ときどき脱走することもありました。いまは脱走する子はいないですが、脱走するということは、教育のほうが悪いんです。

小児科医として

奥地 小児科医として、子どもと何年くらい付き合ってきたら来たんでしょうか。

奥地 1966年から国が不登校の調査を始めたので、1968年というところ、ちょうどそのころに小児科医として働きはじめたわけですね。病院には、不登校の子たちも来ましたでしょうか。

若林 「おなかが痛い」と言っていて、学校を長く休む子などが来ていました。小児科学会の先輩の医者たちは、それを怠けだと言っていました。小児科も細分化が進んでいて、この年鑑(『小児科MOOK』金原出版)を見ても、60番目に「子どもの心の問題」が載っています。私も不登校について書いていますが、当時は不登校は学会でも病気扱いになっていて、私の論調に共感してくれる人はいませんでした。とくに、富田和巳さん(小児科医)とは、しょっちゅう喧嘩していました。富田さんは、親が悪いと言っていて塾をつくったり、お茶を習わせて心を落ち着かせるなどと言っていました。「お茶を習わせて学校に戻れるようになるんですか」と言っていました(笑)。

また、大宜見義夫さん(小児科医)には、「先生は

若林 来年80歳になるので、約50年になりますね。いま思えば、小児科医でよかったです。内科医は秀才ばかりだね。「外科医は何も知らないくせに何でもやっちゃう」「内科医は何でも知ってるくせに何もやらない」という悪口があります(笑)。小児科医は、頭はそんなにいらぬし、子ども相手ですし、楽しいからエネルギーをもらえます。子どもと接していると若返ります。いろんな個性があるからいいんです。

奥地 国際親善病院には何年くらい勤めておられたんでしょう。

若林 1968年から2003年まで勤めていました。一人医長で、部下もいないので、のんびりやっていたんですが、途中からエライ先生が院長になってきて、私はいぶ絞られました。

国際親善病院は、横浜の開港に合わせてできた病院で、外国の人や船員たちを診るためにできた病院です。それで国際親善病院という名前がついています。

何パーセントぐらい、学校へ戻せていますか」と聞かれました。もう一人、久徳重盛さん(精神科医)が『母原病』(教育研究社1979)を書いてましたね。不登校にかぎらず、お母さんが責められることが多かったですが、そんな神様みたいなお母さんはいないわけですが、親の欠点を見つけ出そうと思えば、誰しもいっぱいあるわけです。でも、学校に行っている子と行っていない子の親はどこがちがうのかというと、何も変わりませんでした。

久徳さんの『母原病』は100万部ほど売れたそうですが、私が書いた『エジソンも不登校児だった』(筑摩書房1990)は、売れたといっても1万部くらいです(笑)。

いずれにしても、学校へ戻すが、この人たちの目的だったんですね。

奥地 『エジソンも不登校児だった』は、いまは、ちくま文庫に入ってますね。私も読んで助けられました。いまでも通じる話ばかり書いてあると思います。

若林 いまでも通じるといいうことは、つまり、ぜんぜん状況が変わっていないということですよ。横浜市でも、福島から避難している子へのいじめが問題になっていますが、いじめは昔から同じパターンです。不登校でも、いまでも「児童相談所に行きなさい」という人が多いですが、とんでもない話です。

稲村問題をめぐって

奥地 当時、一番はっきりと病気扱いをしていたのは、精神科医の稲村博さんですよ。1988年に稲村さんの「登校拒否症は早期に治療しないと30代まで尾を引く」という見解が朝日新聞夕刊の1面トップに出ましたよね。私たちが緊急集会を開いたときは、若林先生も来てくれました。

若林 あのころは、何かという稲村博さんが出てきました。彼は、不登校は生半可なことでは治らず、将来、怠け者になるから閉鎖病棟に入院させなさいと言っていました。稲村さんは筑波大学の助教授でしたが、ど

ういうわけか浦和の精神病院(浦和神経サナトリウム)に、たくさん入院させていました。稲村さんは、著書でも「1年ぐらい入院させれば90パーセントは学校に戻れる」と書いていました。文部省の登校拒否の手引きにも関わっていたようですが、稲村さんのところでは、閉鎖病棟から子どもが集団脱走したり、セクハラが発覚したり、いろんな事件があったらしいですね。さすがに児童青年精神医学会で問題になって、川端利彦さん、河合洋さん、渡辺位さん、高岡健さんらが、学会で追及しました。

神奈川県でも、不登校を早期治療させる必要があるという主旨のしおりを出してましたし、横浜市立大の児童精神科も、不登校を病気扱いしていました。当時、「不登校は病気じゃない」と言っていたのは国際親善病院ぐらいじゃないでしょうか。私は、定年になったら、いっさい手を引こうと思っていたんですが、その前に、60歳のときに胃潰瘍で倒れてしまったんです。午後からのカウンセリングの最中に倒れて、2週間ほど入院しました。

奥地 よっぽどストレスがかかっていたんじゃないですか。

若林 そういうことですね。時間の取れない人には、当直する日の晩に相談に来てもらって対応していたりしたので、よく過労死しなかったなと思います。

専門家を信じてはいけない

奥地 最初に、不登校は病気じゃないと気づかれたのは、何人かとの出会いからだだったと書かれています。どんな子たちと出会ったのでしょうか。

若林 いろんな子がいました。なかには、精神科でたくさんの薬を出されている子もいました。私も、最初は稲村さんの考えと変わらなかつたんです。稲村さんの本もずいぶん読みましたが、その通りにやっても、ひとつもよくならなかつたんです。考え方が変わったのは、奥地さんたちの会で渡辺位さんのお話をうかがったからのことですが、いま思うと、苦い経験もあ

りました。

あるときまでは、不登校のケースは神奈川県立こども医療センターを紹介してたんです。日本でも有数のレベルの病院で、すごい秀才の医者がたくさんいるから、そこに行けばパツと治してくれると思っていたんです。でも、ますますひどくなっちゃって、そのお母さんには責められました。

もう一人、吉沢勇(児童精神科医)と対談したことがあります。彼の考え方は、「いじめは昔からあった。こんなに社会が騒ぐようになったのは平和になったからで、生活レベルも上がって、伝染病で死ぬようなこととはなくなったからだ」という考えでした。児童相談所で相談の主任のようなこともされていましたが、驚くほど処方する薬の量が多かつたんです。実際、相模原で、たくさん薬を飲んで嘔吐して、窒息して亡くなっちゃった子がいて、裁判にもなりました。裁判で証言に立った医者の中には「症状に応じて薬を増やしたり減らしたりするから、ふだんの3〜4倍になることはある」と証言した人もいましたが、若い医者が「いくらなんでも彼の処方ば、精神科医の常識からみて、

ちよつとひどすぎる」と証言して、結果、示談になりました。示談の内容は公表されませんから、詳細はわからなかったですけども。

奥地 親は、お医者さんを信じてしまいますよね。精神科医が不登校の専門家と知っている人も多いです。

若林 だから、いけないの。児童精神科医が専門家だと言っても、専門以外のことはまるでわからない人が多い。いわゆる専門バカです。それに、専門家でも学会に行くといろんな異なる意見があつて、議論になるわけです。専門家だから正しいなんてことはない。親は自分で判断しないとイケないです。

政治も同じです。政治家を信じて任せておいたら、たいへんなことになる。最近では、東京都の豊洲市場問題などもそうですね。専門家に任せれば大丈夫だなんてことはない。戦争だつて、お上を信じたあげく、引き起こされたわけです。

奥地 私は4歳のときに東京大空襲に遭つてます。広

奥地 小児科の先生は、人間を丸ごと見ているような感じがありますよね。

若林 児童精神科医は、小児科のことを知らない人がほとんどです。いま、精神科では薬の出し過ぎが問題になっています。SSRI（抗うつ薬、選択的セロトニン再取り込み阻害薬）も、これが輸入されればうつ病がなくなると言われていたのですが、増える一方でしょう。

奥地 多剤多量処方は大きな問題だと思います。一方では、戸塚ヨットスクールなどの矯正施設でも、ひどい実態がありましたね。

若林 戸塚ヨットスクールも、マスコミが盛んに取り上げていたんです。「いまの親は甘い。戸塚ヨットスクールでは、子どもがこんなにたくましくなっている」なんて報道していた。でも、あるとき、戸塚ヨットスクールを出た人が暴走族になつて、戸塚ヨットスクー

島に戻つたら、原爆で皮膚がケロイドになつた方もたくさんいました。

若林 あれだけの惨事を引き起こしたのに、いまだに誰が始めた戦争かもわからない。日本には、そういう無責任体質があります。専門家や有識者、あるいは多数派を正しいと思つてしまう。宗教でも、日本ではキリスト教はなぜか根づかず、いまでも信者は1パーセントしかいませんが、少数派だから、まちがっているということではないですね。

精神科と小児科のちがいは

奥地 不登校の話にもどりますが、精神科と小児科では、不登校への対応はちがっていたんでしょうか？

若林 私は小児科をホームグラウンドにやってきたんですが、小児科学会誌には不愉快なこともいっぱい書かれていました。一般には、何か心の問題があると精神科に行くけれども、どうも結果がよくないわけです。

ルに押しかけて窓ガラスを割る事件があつたんですね。そのとき、事情を聞いた警察が「それは石を投げるのも当たり前だ」と言つたという話があります。その後、さまざまな実態があきらかになつて、死亡事件も起きたのは知られている通りです。しかし、戸塚宏さんはいまだに反省してません。最近幼児を海に放り投げたりして問題になつてます。自分の信念が一番正しいと思つているわけです。

奥地 実際に人が死んでいるのに、続けているというのが信じられないですね。

若林 1992年、名古屋地裁は、暴力の事実を認定しながらも、「訓練は情緒障害の治療教育という正当な目的によるもの」だったということで、戸塚校長に対して懲役3年、執行猶予3年の判決を言い渡しました。おかしいですよ。その後、高裁では懲役6年の実刑判決になりました。裁判も、裁判官によって判断が変わります。専門家だから正しいとはかぎらない例のひとつと言えるでしょう。

奥地 人権侵害でも、教育という名目があると、ゆるく見られる傾向がありますね。若林先生が、専門家に判断をあずけるのではなく、自分の頭で考えることが大事だというスタンスを持つようになったのには、何か背景があるんでしょうか。

戦争体験が原点

若林 私の原点は、やはり戦争体験です。私の父親は、左足が不自由で松葉杖をつけて歩いていて、だから兵隊にも行っていないし、戦争はやばいと思っていたそうです。1944年3月、世間では、まだ戦争に勝つと思っていたころ、私は幼稚園の卒園式を控えていたんですが、父親は「そんなことは言ってもらえない。命が大事だ」と言っていて、私を叔父（父親の兄）のいる佐渡島に疎開させました。たしかに、そのころの横浜でも、空襲にそなえて、夜はサーチライトで空を照らしてました。周囲からは非国民扱いされたようですが、その1年2カ月後、1945年5月に横浜大空襲があり、

わが家も焼かれてしまいました。それで、両親も佐渡島に逃げてきました。でも、住む家もなく、田んぼにあったバラック小屋で、水道もないところで暮らしました。

戦争が終わったのは、私が小学校2年生の夏休みのことでした。そして9月からの新学期、先生の言うことがガラッと変わりました。担任の先生は兵隊あがりの人で、それまでは「兵隊ひとりアメリカ兵を10人殺せば勝てるんだ」と言っていたのに、突然、「世界中の人と仲良くしましょう」と言うわけです。子どもたちからすると、「何だ、この先生は」と不信感を持ちますよね。小学校2年生でも、それはわかりました。

小学校3年生まで佐渡島にいたんですが、非常に平和な教育だったように思います。その後も、学校では、民主主義や自由はすばらしい、新しくできた憲法も、こんなすばらしい憲法はないと叩き込まれました。ところが、近ごろは憲法も古くなったので変えようなどと言う勇ましい人が出てきましたね。みんな戦争を知らない人たちです。安倍首相も戦争がどういいうものかを知らない。私は、子どもたちには「このあたりもみ

んな焼け野原で、死体がゴロゴロしていたんだよ」と話すんです。横浜も、戦後しばらくは米軍兵舎があった、いまの沖繩と同じような状況でした。親善病院のあたりも兵舎だったのが、米軍が引き揚げたあとは、雑草が生えて、そこで牛でも飼って牧場にでもしたらという冗談がかわされたほどです。

まあ、そういう戦争体験が原点にあるものですから、えらい人や専門家の言うことを鵜呑みにしてはいけないと思います。東日本大震災のときも、先生の言うことを聞かずに逃げた人は助かったけれども、言うことを聞いていたがために、津波に呑みこまれて死んじゃった人がたくさんいましたね。

薬害なんかでも、えらい先生がこれはいい薬だと言っていたものが、問題になるわけです。大学教授はしがらみがありますからね。僕が医者になりたてのころ、大阪まで学会に行くというと、製薬会社の人が切符を買ってくれたりしました。産学の癒着ですね。だから簡単に信用してはいけません。

奥地 医者になられたのは、どういうきっかけでした

か。

若林 私は、文章を書くのが好きだから、もともと小説家になりたかったんです。とくに森鷗外が好きで、森鷗外も医者でしたしね。でも、医者は毎年1万人近く新人が出るんですが、小説家は1万人もいません。確率の問題で医者のほうが楽だと思ったから医者になりました（笑）。もともと書くのが好きだったので、エジソンやアインシュタインの本を書いたのも、そんな影響からです。

奥地 そのおかげで私たちは『エジソンも不登校児だった』を読むことができたわけですね。わかりやすい言葉で伝えてもらって、たくさんのお親子が救われたと思います。

若林 いや、それは相性がありますからね。相談にいられた方でも、波長の合わない方が半分ぐらいはいたように思います。たとえば、相談に来ることで学校へ行かせられるようになると思っっている親の方は、1)

2回で来なくなりします。基本的に、私は話を聴いているだけです。不登校にかぎらず、いろいろつらいことはありますが、話を聴いてやればいいんだと思って、やってみました。

奥地 各地の親の会で通信を若林先生のところへ送っているのと、どこの会へもまめに、お返事が返ってくるので、みなさんびつくりされてました。

若林 小説家になりたかったので、筆まめなんです(笑)。

レッテル貼りはいらない

奥地 『エジソンも不登校児だった』は、1990年の刊行ですが、この本では、それまで「学校ざらい」とか「登校拒否症」と言われていたのを、「不登校」と呼ぶのがいいと提唱されていますね。どうしてそう考えたんでしょう。

てないと「不登校」とレッテルを貼る。でも、ほんとうは、そんなレッテルはいらないんです。

奥地 私も『登校拒否は病気じゃない』(教育史料出版会1989)という本を出しましたが、病気の人を差別しているという人もいました。若林先生が『エジソンも不登校児だった』を写しとったのは、どういうきっかけだったんでしょう？

若林 私がかつては、不登校というのは「子どもがだらしないうし、親もだらしないうし。何とかしてはいかない」と思っていたんですが、渡辺位さんの話を聞いて、「そうか。そういう学校に行かなくて、えらい人いっぱいいるなあ」と思って、コペルニクスの転換をしたんです。そこで、パッと「エジソン」の名がひらめいたんです。そう言えは、あの人も学校にほとんど行っていないな、と。

奥地 不登校とエジソンをつなげて書かれたのは、見方を変えましょうということだったんですね。

若林 だって、学校に行っていないんだから「不登校」と言うしかないでしょう。「○○症」というのは病気ですよ。エジソンもそうですが、学校に行かない人にも立派な人はいるわけです。一方で学校へ行っても自殺してしまう人もいます。子どもが亡くなる理由は、事故、ガン、それと自殺です。子どもの自殺の場合、大人たちが自殺に追い込んでいるんです。「学校に行きなさい」と言うのも、そのひとつでしょうね。

しかも、登校刺激も、ただ「行け」というのではダメだから、上手に登校刺激しなさいと言ったりしていますね。でも、日本では、教育というと学校しかないと考えているのがおかしいんです。もつとフリースクールなどの選択肢がないとダメで、そこを変えなくてはいいけません。

たとえば私はお酒が飲めないんですが、それだけで「飲めないのはかわいそう」と言われてしまう。飲めない人は世の中にいっぱいいて、お酒以外の楽しみを知っているんですが、少数派というだけで肩身の狭い思いをする。

世間は少数派にレッテルを貼る。だから、学校に行つてないといふことでは、けつしてないですね。
若林 そうですね。私に通っていた小学校の近くには、大天才歌手の美空ひばりさんが住んでいたんですが、小学校2年から歌手をしていたので学校には行っていません。それで、校長先生が仮免許の卒業証書を出したんです。作家の吉川英治さんもほとんど学校に行つてませんでした。でも、吉川さんは中国の文献も読み込んで小説を書いている。学校に行かないと一人前にならないといふことでは、けつしてないですね。

僕は、変わった人の言葉が好きなんです。ニユートンの「我々は、海岸で貝殻を拾って遊ぶ子どものようなものである。真理の大海は、海の彼方にあるのかもしれないのに」という言葉や、坂本竜馬の「世の人は我を何とも言わば言え、我なすことは我のみぞ知る」という言葉とかね。

2冊目で、『アインシュタインも学校嫌いだった』という本も書きましたが、これは二番煎じで、あまり売れませんでした。

そういう偉人ではなくても、私の友だちにも、高校までは学校がつまらなくて誰とも話さなかったけど、

大学に入ったら「もう自由だ」と感じて、非常に明るくなった人がいます。野球選手でも、よその球団に行ったら活躍する人もいますよね。その人に合う場所さえつくってやれば、潜在能力を発揮する。それは未知数です。芽を出す環境がなければ、誰しも芽を出せないですよ。結婚だって、フィーリングが合わなければ、ほんとうに幸せかどうかわからないです（笑）。給食だって、日本の学校では、好き嫌いを認めていないですね。

「学校信仰」とも言われましたけど、学校が一番すばらしいというイメージがあったわけです。でも、実際は行ってみなければわからないんです。東大に入ってたって幸せとはかぎりません。最近も、電通に入社して過労死してしまった事件もありましたね。

分類して見るのではなく

奥地 90年代末ごろから「ひきこもり」が問題になってきましたが、これについては、どうぞお考えでしょう。

最後に、不登校の子どもや親たちに一言お願いします。

若林 不登校には、すばらしい先輩がいますから、一歩でも近づいてください。でも、それは名を成せば幸せということではないです。マリー・アントワネットだって、最後は首を切られてしまったわけですし、人生はわからないもので、だからこそ、おもしろいんです。学校へ行くと幸せ、行かないと幸せじゃないなんてことはありません。

奥地 今日になつかしい話も含めて、不登校の原点をお話しいただいて、ありがとうございます。80歳前でも元気で、若い方と関わっておられるのはすばらしいです。どうぞお元気で暮してください。

若林 不登校を病気だと思うのと同じですよ。いまは発達障害もブームのようになってますが、「不登校」も、「ひきこもり」も、「発達障害」も、レッテルを貼るのは、そもそも「病気」と思っているからでしょう。そこで、いろいろ分類している。昔だったら、町や村のお医者さんは、ぜんぶ診たんです。科学というのは分類から始まるんだけど、現在は、専門家は非常に視野が狭くなっていると思いますね。

奥地 「不登校」というのは学校を中心にした言い方ですね。学校が合わない子は学校以外で育ってもいいとなれば、「不登校」ではなくなるわけです。学校教育一本を変えたいですね。でも、最近は何が変わり始めて驚いています。最近、文科省から出た通知では、不登校を「問題行動」と判断してはならない、不登校児童生徒が悪いという根強い偏見を払拭することが重要、フリースクールなどと連携することの意義は大きいなどと言っています（「不登校児童生徒への支援の在り方について」2016年9月14日）。行政も少し動いてきました。

◇本プロジェクトにおける用語の取り扱いについて

「不登校」を意味する用語は、長い年月のあいだに、「学校恐怖症 (school phobia)」「登校拒否 (school refusal)」「学校嫌々」「不登校」など、さまざまな用語が使われてきました。立場や人によって、その言葉の使い方や、意味するところが異なります。不登校50年証言プロジェクトでは、統一した用語に整理するのではなく、話し手の文脈に即して使うこととします。

本プロジェクトは寄付で運営し、すべての記事が無償で公開しています。
ご寄付のほど、よろしくお願いいたします。

郵便振替口座：00100-6-22077

加入者名：全国不登校新聞社

一口 1000 円 / 3000 円 / 5000 円

不登校 50 年証言プロジェクト <http://futoko50.sblo.jp>

#17 若林実さん

インタビュー日時：2016 年 11 月 17 日

場 所：横浜家庭学園

聞き手：奥地圭子、関川ゆう子、石林正男

テープおこし・写真撮影：石林正男

記事公開日：2017 年 5 月 10 日

編集・発行：全国不登校新聞社

© 2017 Zenkoku Futoko Shimbun sha

東京編集局（関東チーム事務局）

〒114-0021 東京都北区岸町 1-9-19

TEL:03-5963-5526 / FAX:03-5963-5527

E-mail:tokyo@futoko.org

大阪通信局（関西チーム事務局）

TEL:050-5883-0462

E-mail:osaka_c@futoko.org